瀬戸ものと唐津

辻　嘉一

桃山時代まで

関東から関西にかけての陶磁器は一般に「瀬戸もの」の一語で通じますが、中国や四国、九州から北陸路――秋田あたりでは「唐津」と呼ぶそうで――このことは、昔、船便によって届いたからでありましょう。

昔は個々の産地は問題にされなかったのでありますが、近頃は、食器に関心をもつ方がふえてまいり、陶磁器の研究もなかなか深い方があり、今後は社交的にも常識として知っておかねばならない時代になってきました。

日本で磁器（石焼の白磁）の生まれたのは江戸初期（元和元年一六一五）に入ってからであり、それまでは、縄文式や弥生式の土器から、土師器、須恵器の流れを汲む、伊賀、信楽、丹波、備前、常滑などの陶器（土焼）ばかりが使われておったのであります。

ところが、現在、日本は陶磁器の輸出国となり、その進歩発達はめざましく、日本人の器用さは素晴らしいのであります。しかしチャイナ（陶磁）と言われるだけあって、中国は宋の時代に完成しておったとも言えるのでありまして、悲しいかな日本は、中国や韓国の技法を模したものが多いのであります。

織田信長が天下を掌握し、天正（てんしょう）と改元した十一月二十三日に、京都の妙覚寺で茶事を催し、堺の豪商三人を招いた記録が残っております。その時の懐石の食器は、タコカワラケが用いられております。

ところが、天正元年（一五七三）は不思議にも中国においては、豪華絢爛（ごうかけらん）な色絵磁器の隆盛を極めた万暦の元年でありまして、彼我の違いは大きく、恥ずかしいほどの差異でありました。

その頃、信長を始め秀吉や古田織部などの故郷ゆえの庇護（ひご）に

よって、美濃や尾張に瀬戸黒、黄瀬戸、志野、織部など日本独特の見事な陶器が発達いたしました。また、京都に於ては利休居士の指導になり、楽の長次郎が黒楽の茶碗を完成いたし、茶道の流行によって旧来の諸窯を始め、唐津においても名品が生まれましたが、いわゆる桃山期の作品は総じて素朴で豪快――といった美しいものが多いのであります。

慶長時代以後

秀吉の征韓の役以後に、韓国の陶人が沢山来朝して、九州一円から萩や出雲にも窯がきずかれました。唐津から佐賀、有田、伊万里、高取、上野、小代、八代などに個性のあるものが生まれたのであります。

その後、李参平という名工が有田の泉山の磁土を発見―天狗谷で窯をひらき、日本最初の白磁に成功いたしました。(元和元年一六一五)

そして、約三十年後(寛永末一六四三)に柿右衛門が赤絵の絵付を完成しましてから、華麗な鍋島も生まれ、九谷が北陸において華を咲かせました。

京都においては楽焼の代々に名手を生み、光悦の手造りの才気の美、仁清の艶麗の美、乾山の絵筆の冴えの美、仁何弥の雅趣美など、それぞれが歴史に残る美器を造りました。

さて、食器を求める時どこが見どころか――とおたずねをうけますが、要約して「使い勝手のよいもの」ということであります。

絵付が綺麗だとか、型姿が変っているからだとか――は、第二義的であります。

手に持って口元に近づけて食べると、姿もよく、料理の香りも味わえ、食事礼法にも叶っているのですから、まず、持ち具合がよくて、お露を吸うにも都合がよく、しかも、持ち重りのしないもの――といって、薄肌のものはこわれ易いので、注意しましょう。

絵のあるなしは求める方の好みによりますが、季節感がはっきりしていると、使う季節が短いことも考えねばなりません。

食器は料理の着物でありますので、装飾性が過剰でありますと食器の一人歩きのように感じられ、料理が敗けてしまいます。

食器はあくまでも脇役であり、料理を引き立てねばなりませんので、控え目なもので健康的な感じのものが理想であります。